

二次元ぷち文庫

2D PETIT POCKET NOVELS

空蝉

表紙 助三郎



漆黒の
令嬢マスター
外伝
人獣母子相姦

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『漆黒の令嬢シスター外伝 人獣母子相姦』
に基づいて作成しております。

※本作品は二次元ドリームノベルズ『漆黒の令嬢シスター 獣魔の贄』（キルタイムコミュニケーション・刊）とあわせてお読みいただけますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



漆黒の
令嬢マスター
外伝
人獣母子相姦

登場人物紹介

Characters

くろゆりさき

黒百合沙希

名門エクソシストの家系に生まれた少女。ゴスロリ衣装に身を包み、魔を狩る。父の仇である魔犬・ギリアム（既に死亡）に産まされた3つ子の魔犬がいる。

リズ

沙希の使い魔。主人である沙希にいつも苛められているが、少しMっがあるため、実はまんざらでもない。

オルガ

沙希の子である魔犬。牝。

ソルディ

沙希の子である魔犬。牡。

レニード

沙希の子である魔犬。牡。

うらかな日差し込む午後のまどろみ。由緒正しきエクソシストの家系、黒百合邸宅の大広間で、一人の少女と褐色の女悪魔が相対していた。

「暇だわ」

黒百合家の息女、沙希は退屈に耐えかね、愛用の黒いゴスロリシスター服が皺だらけになるのも厭わず、うつ伏せで寝そべったふかふかのソファ上でぼそりとつぶやく。どうせ見ているのは気心の知れた相棒のみ。それに衣装にアイロンをかけるのはその相棒、向かいあう女使い魔リズの仕事なのだから、少女自身が気に留める必要は全くないのだ。

「ああゝあ。皺取るの面倒なのにい」

何か文句が聞こえたが、完璧に無視する。それよりも問題なのは、連日行ってきた魔犬狩りがここ数日はあちらからの音沙汰がなく、ぷつぷつりと途絶えてしまっていること。すでに狩り尽くしてしまったのか。それとも――。確証はないが妙に嫌な予感がする。

「お腹が空いたんで、魔界に帰ったんじゃないですかあ？」

「ぶ。貴女じゃあるまいし」

リズがショートに切り揃えた髪を振り乱しそっぽを向いたが、その様がまた少女の嗜虐をより誘う。悪魔の癖に素直で間抜けで従順な牝奴隷。このところ、戦いのパートナーというよりも夜の閨の供といった色合いが強い、小間使いまでをこなす褐色の悪魔を困らせるのはもはや日課ともいえる。なんとなく、見ているだけで催してきた。

「ねえリズ。ちょっと早いけど、ベッドに——」

艶を帯びた声の、ちよつとどこるかまだ日も高いうちからの誘いは、直後のハスキーボイスにあっけなく遮られた。

「あ、そういえば！ そろそろあの子たちの御飯の時間ですよ」

「……。はいはい。分かっているわよ。私の可愛い子供たちだものっ。当然でしょ」

内心ムツとしていることは癪なので伏せておくことにする。タイムリーに、隣の部屋から低い重低音が二つ、そして高めの透き通った遠吠えが一つ、折り重なるように鳴り響いてきた。どうやら与えた玩具には早くも飽きてしまったらしい。

「さっ。準備できたら行くわよリズ」

「やっぱ今日もあたしも、ですかあ」

「当然。オルガはあんたのほうがお気に入りみたいだし」

寝そべっていたソファからようやく脚を上げ、反動で立ち上がる、皺の寄ったゴシックドレスに案の定女悪魔が眉をひそめたが、完全に無視してツカツカと歩を進める。

慌ててついて来る褐色肌を横目に見てほくそ笑み、ゆっくりと二人揃って隣の部屋へのドアをくぐった。美しいブロンドが、暗闇にさあつと揺れる。闇夜に戦場を駆ける女二人にとつて暗く沈んだ室内の様子は、目を凝らすまでもなくはつきりと映し出されていた。

「お待たせ。みんな。お腹空いたでしょう、すぐにお食事の準備をするわね？」

薄暗い部屋の中には、三匹の犬が寄り添うように、けれど鋭い眼光を闖入者へと射し向けていた。怒っているのではない。父親である魔犬王の血を色濃く継いだ兄弟の、生来の目つきだ。証拠に、我先にと駆け寄り寄ってくる三匹からはわずかな敵意すら感じられなかった。不本意な、それも異種間での妊娠であったとはいえ、沙希が胎を痛めて産んだ、愛しい我が子たち。

「ママ！ 俺が一番乗り。なつ、いいだろお？」

「ソルディ。お兄さんは最後まで我慢するものよ」

「ママ、じゃあ僕が最初だねっ」

「レニード。がつつかない。飢えた男はレディに嫌われるわ」

まだ生後一年も経たぬのに随分と大きく育った子供たちに押し寄せられ、思わず足元が不確かになる。だが、心地よい重み。共に歩んできた時間を感じさせられる、温もりに満ちた重みだ。二匹の牡の頭を撫でつつ、最後に残った唯一の「女の子」を見つめる。

「お母様。わたしはその……リズさんをお願いします……」

「うん。分かっているわよ」

伏し目がちに言う末娘が兄たちに遠慮しているのだと、ちゃんと理解できている。だから。女王気質の沙希にしては飛びつきりの優しい目で、娘であるオルガに微笑みかけた。

「腹減ったあ」

「早く。早くうママ」

「……やれやれ。男の子はデリカシーがないわね」

軽く溜め息をつき、首を振ってから——沙希はゆっくりおもむろに手をかけたスカート
の裾を捲り上げていった。

「リズ、用意はできてるわね。こっちに二皿。貴女が一皿。薄桃の小皿がオルガ用よ？」

「知ってますって。はい、どうぞ」

——ひゅんっ、ひゅひゅッ！

投げ寄越された深底皿を易々と素手で絡み取り、息子たちの半歩前へと置き据える。ま
ずは右側のレニードの皿に狙いを定めた。まだ少女と呼ぶに相応しい年頃の令嬢は皿の真
上へと徐々に腰を落とし、同時にスカートの裾を限界までまくっていった。

「わあ。ママのおマ○コ、とってもキレイだね」

「ふふっ。毎日のことなのに、んっ。少しはずかし……」

皿の上で股を開いて和式便所に座るようにしゃがみ込み、露わとなった秘処を突き出し
てみせる。兄弟犬の視線がぴつちりと閉じた股間の縦筋に集中するのを感じ、心地よい羞
恥に包まれて、指で秘部をなぞる。その部分に息子たちの視線を邪魔する茂みはなく、小
さく幼い外見の中にも母としての成熟を思わせる複雑な肉唇が剥き出しとなっていた。

（ああ、熱い。見られてるだけで感じちゃうなんて。子供たちを産んでから、敏感になっ

ちやつてる……)

彼らの視線をじかに浴びたいがために、己の手で恥毛を処理し、日々の手入れも欠かさずにいる。子供たちの望むものは何でも与えたい。それで自分も気持ちよくなれるのなら一石二鳥だ。放蕩な幼母は、放蕩にふやけた頭でそう結論づけていた。

「それじゃ、んっ、いくわよ……くう、んんう」

衣服の上から右手で乳房を揉み解し、股間に這わせた左の指先でやんわり肉の唇を押し広げていく。にちゃあ……と早くも蜜が糸引く音を、肉襷同士が剥がれる様を凝視するソルデイとレニードは人の十倍も利く耳で聞き取った。

——くちゅっ、ちゅくちゅぶっ……。

(子供でも男の子だものね……。がつつくように私の、母親のオマ○コを見つめてる)
脇に目を逸らすと、褐色の小悪魔も同様に脚を押し広げ、牝犬オルガの前で股を広げているのが見て取れた。

これから二人は一日三回の儀式、その二回目を執り行う。朝、昼、晩。三匹の子犬に食事を与えるという仕事。魔界の住人である彼らが口にすることができるのは、人間界では女の愛液のみ——。それは魔犬一族が好む蜜の味に酷似して、かつては子犬たちの父、魔王ギリアムが貪った、濃密な極上の喉越しを備えた分泌液。

「んっ、ふう……胸も、張ってるう……」

手馴れた手つきで己の乳房を揉み扱く。ドレスの内側では、黒い下着に押し包まれた乳肉が嬉しそうに震えている。乳液を湛え張り詰める乳肌の下弦に刻み込まれた『隷属の刻印』がカツと火照って、溜め込まれたミルクを股下から零れる蜜液へと変換してゆく。

送り込まれる快楽に子宮が痙攣し、背筋に電流が奔る。震える指先をどうにか押さえて漆黒の令嬢はひたすら自らの双乳を押し潰し続けた。

「なあママ。俺たちが手伝うって」

「僕、ママのおっぱいかじるの好きだなっ」

「だっ、めよ……貴方たち、加減を知らない……くふう！ だからあ！」

ゾクリ——子供たちが左右の乳房に吸いつき、凶悪な牙で勃起乳首をかじる様を想像する。光と闇双方の呪力を受け継いだ三匹の子は、生まれながらにして大人の魔犬を、さらに沙希までも凌駕する実力を備えているのだ。

いつだったか、戯れに吸いつかせた乳房が痣だらけになったことを思い出す。また背筋を駆け抜けた甘美な痺れに、思わず乳肉に這わせた指先に力がこもった。

「くっ、ひああああ……！ で、出るわっ……ああひ……ッ！」

——ぷっ……しゃあああ、ぢよぼっ、ぼぼぼっ……。

押し潰された柔肉から、甘やかでその癖鋭い快楽信号が、体内を突き抜ける。大股開きで捲り上げたドレスの裾下で、肉の唇がヒクヒクと蠢き、一斉に弾け散った。沙希は悦楽

の中で背を反らせて軽い絶頂を味わい、トロリと濃厚な蜜を小皿に向けしぶく。強すぎる勢いのままにぱちやぱちやと皿の底を叩く蜜汁は、少しづつ溜まり込んでいった。

「さ、ああ……レニード。召し上が、れえつ。あふうああん……」

我が子らの食事。かつて魔犬どもに改造を施された肉体はたやすく快楽を享受し、乳を搾れば溜まったミルクの代わりに股下で蜜が噴く。一日三度の行為のたびに沙希は放水の言い知れぬ喜びに溺れ、凶らずとも魔犬王に嬲られ身籠らされた過去の日々を思い出す。

このごろ随分と食欲旺盛な子供たちは小皿一杯分ではとても満足してくれはしない。もつとたくさん搾り出さなければ。もつと搾乳快楽に溺れてあげなければならぬ——。

「んくうああん、オルガ様あ。いいですう、もつと、もつとベチャベチャ舐めてえ！」

傍目を向けてみれば、リスがオルガに股間を舐められ喘ぎ狂っている。呪術で感度を上げた女悪魔はああして牝犬のざらついた舌で蜜を穿り啜られるのが好きなのだ。

(私の娘にはしたくない真似させて……あとでお仕置きだわ)

このところ娘が自分よりもリスに懐いているのが気に食わないこともあって、沙希は固い決心を胸に刻む。契約により結ばれた従者である女悪魔を可愛がるのも、主たる少女の務めである。これで今夜の楽しみができた。

「ママあ。俺の分も早くう！ 腹減ったよお」

「ん。ちよつと待ってて。——ッ!!」

「なっ……こ、こら貴方たち。ママにおちんちん擦りつけないでえっ……」

漆黒のドレスにいくつも息子たちの透明汁が染みを作る。後ろ足で立つチンチンの体勢を取った二匹は競いあつて汚濁を母愛用の衣装に塗り込めていった。彼らは本能的に知っている。牝は、虐めれば虐めるほど愛蜜を垂らす、放蕩で淫欲に満ちた生き物なのだ。

（ああ、臭い子供たちのお汁。たくさんドレスに染みついてえ……）

子を孕み育てた沙希も知っている。牡の濃密な精汁は牝を狂わせる。かつて種を仕込まれた強大な魔犬が、溢れる逞しさと絶倫の肉棒で自身を虜にしたように――。

「はあ、ああ、濃い匂い……。ソルデイ、レニードお、まだ子供だと思つてたのに……」

父親譲りの野生に満ちた勃起をドレス越しに腰へすりつけられ、凶らずも股の奥がジュンと潤む。ギリアムを自ら屠つて以来、一年近く男を迎え入れてはいない。男日照り、未亡人、近親相姦。荒唐無稽で、かつ淫靡な響きの言葉が次々と頭に浮かぶ。息子と交わるなど許されない。揺らぐ心に必死に言い聞かせようとしても、すでに獣の子を孕み育てたという歪んだ現実の前に、人としての理性など脆くも崩れ去つてしまふ。

（子供たちのおちんちん……。熱いおちんちん、欲しい……ッ！）

体内でどんよりと滞留する欲情に抗いきれず、自然と膝を地面につけ、顔を精一杯息子たちの肉棒へと近づけて舌を突き出す。

あとほんの数センチ。最後の一線を飛び越えて舌を伸ばせば届く距離に、ぷうんと牡の

生臭さを纏った肉棒が二本もある。片方は雄々しく反り返った肉厚の剛棒、もう一本、弟のレニードの持ち物は半ばまで皮を被った可愛らしい仮性包茎のペニスだ。どちらも美味しそうな牡の匂いをたつぷりと纏い、今か今かと母の舌先を待ちわびて蠢いている。

「ガキどもが苦しそうだけ。優しいママが一発ヌイてやったらどうだア？」

敵魔犬の言いなりとなるのは癪だ。だが、まだ自慰すら知らぬ子供たちを助けるため。母として息子の性の扉を開ける、最初の女になれるのだという優越感に背を押され、ついに沙希の舌が震えながら肉棒の先端へと引き伸ばされた。

「んん……びちゃ、れろお……」

「あつあう！ すげ、チンコビリビリするっ……」

「ずるいよママ。僕のも、僕にもペロペロしてえ！」

口中に苦みがじわりと浸透してくる。先んじて肉棒を舐められた兄犬は、母の舌の柔らかさと粘つき、ねつとりと絡む熱に驚きながら、軽く先を突かれただけでも大げさに腰を振る。後回しにされた弟犬は、本当に悔しいといった風でもじもじと腰を揺すりおねだりをしてきていた。

「んふ、まつれれ。……んぽっ！ レニードのも、ちゃあんと舐めてあげるわ……あむ」

「んひあ！ ああ、あつたかい。ママの中とっても気持ちいいよっ！」

ぱくりと啜えられる瞬間怯えたような不安な表情を覗かせ、温かな口内に囚われた途端

に皮被りの肉幹を震わせ甘い声を上げた。豪胆な兄とは違う愛しさがレニードにはある。あつさり肉棒を吐き出されたソルディも、再度の啞え込みを要請して沙希の頬を肉の雁ですつてくる。雄々しさと背伸びしたがり両極端を感じさせる兄犬も、可愛い沙希の息子に他ならない。

（誰にも渡さない。私の可愛い子供たち、可愛い、愛しいおちんちんたち……！）

二匹ともが性格を如実に現した肉棒で母を求めてくれていることに嬉しさが込み上げてくる。父譲りの極太の剛直も、皮を被った成長途上の仮性包茎も。どちらも母親である沙希が今は独り占めできる。

「んあむッ！ んんう、んぶあ！ ほら、二人ともおちんちん寄せなさい。はぶっ……んふふ。いつひよにらめてあえるう」

舐めてあげる——不明瞭な母の誘いを、兄弟犬は共にはっきりと聞き取っていた。急いで二本の肉棒が沙希の舌を求め、中央に押しあいへしあい寄ってきた。漆黒のドレスに、ぼたぼたと息子たちの先走りが滴り、黒よりなお濃い染みをいくつも刻み込む。

膝立ちでしゃがみ股布部分に手を下ろせば、そこにさらに少女自身の溢れる蜜がぶちゅりと押しだされて新たな染みを作っていく。スカートの下はもうドロドロの状態だった。一年ぶりの牡肉の味わいに、否応なく身体が、乳の刻印が、胎奥が反応している。

「は、早くッ、ママあ！ 俺我慢できないよおっ！」

「僕だって、おちんちんのムズムズ耐えられないっ……ママのお口に入りたいッ！」

たぎる獣欲をコントロールもできず、我慢することを知らぬ子たちの要求に、沙希は母の無償の愛を込めた笑みで受け応えていく。沙希は犬がチンチンをする時の体勢で、文字通り牝犬となって息子たちの肉欲棒にかぶりついた。まずは二本の先端を交互に舐め転がし、溜まっていたツユを舐め取ってやる。

「あむん、れるる……せつつかないの。デリカシーのない男は、女の子に嫌われるわ……ぢゅぢゅ！　ちゅりゅる、ちゅぽっ、ぽぶぶ！　んんふうう……！」

舌先を滑るドロリと濃厚な粘つくカウパー。中々喉元を滑り落ちてくれない濃ゆさに、思わず胸の鼓動が高鳴る。苦みの強い味わいも、舌先に感じる粘っこさも。一年前、忌まわしき教会の地下室で味わった魔王のものと同じだ。

（なにも、んっ……そんなところは似なくても……はあんんう、この匂い、すご……）

まず、溜まりに溜まった二匹の欲望を吸い尽くしてやらなければ。生臭い牝の臭気しつつとりとまどろみつつ、舌先を左右へ忙しなく交差させ、兄弟の交じりあう淫汁を口中へとしまい込んでいく。幹に舌の表面を張りつかせてこびりついた垢を二本分丁寧に取り払い、舌先に乗せたまままた口内に溜め込む。そうして、いい加減息が辛くなつたところを一気にゴクリと喉をうねらせた。

「んぐっ、ぐんう……っあああ。喉に絡む、とつても臭くて、男らしいわ二人とも……」

この頃になると、もう敵魔犬の存在などすっかり頭から消し飛んでいた。今は相對する愛し子を慰めてやるのが全てだ。手馴れた口淫奉仕に、早くもレニードが、一瞬遅れてソルデイの太い肉幹までがビクビクと激しく脈を打ち始める。

「あひ！　だ、ダメだ！　お、俺ええっ……！」

「腰が変だよお、ママのお口でちんちん溶かされちゃううう！」

「んふ。我慢しないでいいから……はむッ！　あぶう、ぢよぼぼぼッ！　もう一本、うああむッ！　ぐぼっ！　むぐぢゅぢゅ……ッ！」

いつでも好きな時に出していい。そう子供たちに告げてから包茎の肉棒を咥え込み、舌先で亀頭の割れ目と皮の裏側を抉る。素早く口を離して、待ちわびる肉厚の赤黒いペニスを一気に喉奥まで送り込んだ。幹にネットリ這わせた舌で振動を与えれば、ドブドブとカウパーが舌の上を滑り落ちてくる。

（もうすぐ……二本いっぺんに我が子の初射精を浴びられる。こつてりした童貞ザーメンがくるうう……！）

想像だけで股間がジュンと湿る。あとでドレスをリズに洗濯させよう。場にそぐわぬ思考が不意によぎった。乳下に穿たれた刻印が二匹の魔犬の呪力に反応してひっきりなしに媚快楽を乳腺に叩き込んでいく。直結した股間で溜め込まれた蜜が、手をつく沙希の掌の内側で大量に飛沫を上げた。

「んんぐううう！ むぐつ、ずぼぼおッ！ らひてつ、いっばいママにかけれええ！」
 欲情した魔犬と肌を触れ合わせ、沙希の肉体は一足飛びにトップギアに切り替わる。乳
 と子宮の疼きにも追い立てられ、少女の舌先のざらつく味蕾が二本の肉棒を往復し激しく
 舐め回した。

「うあ、出るッ！」

二人の息子の声がぴつたりと重なる。わずかひと時遅れて、二筋の白濁シャワーが弧を
 描いて沙希の鼻筋へと飛び散った。

——びゅぶばばああッ！ どぼどぼぼぼぶッ！ ぶりゅぶびびびィィッ！
 「んはああんッ！ しゅごつ、出しすぎつ、貴方たち……んぢゅ、ぢゆるるうう！」

小ぢんまりと整った高い鼻梁に張りつく汁が鼻筋を通って垂れ落ちるのを、口の端に飛
 び散ったものと合わせて舌先でさらって、喉へと流し込む。食道を通過する粘液の温度で
 カッカと体内が火照っている。

ベタベタと肌に絡む白濁の温かさに、甘い声音を留めることができない。欲望の濃さを
 象徴する濃縮汁は高い粘度そのままに沙希の黒ドレスを穢し、じわりと染み込んで素肌
 まで牡の徴を刻みつける。

左右の瞳に一本ずつ映る肉棒から白濁の糸が引いて漆黒のドレスへと滴り落ちていく様
 に、正真正銘血の繋がった我が子の、獣臭い精液を飲んだのだと実感させられる。なんと

もいえぬむず痒さと喜悦に胸が満たされ、思わず股間がブルリと震えた。

（ああ、スカートの下すごいことになってる。エッチなお汁でベトベトにい……）

顔を伏せたものの、スカートを捲り上げて確認する勇氣はなかった。精を嚙下するたび、覆うもののない股下では新たな蜜がしぶく。ヒクヒクと子供たちが鼻を鳴らし匂いを嗅ぐ音が聞こえる。全身を覆っていた淫熱が嘘のように引くと同時に、忘れていた羞恥心が急速に首をもたげ始めた。

口元に飛び散った白濁汁を、自然に突き出された舌がぺろりと舐める。苦みと、粘つこい舌触り、そして獣臭さと牡の欲望を詰め込んだ臭み。どれもが舌先を痺れさせ、流し込む喉元を熱くさせる。

「んきゅっ……子供たちの一番搾り、飲んじやつたあ。ふあ、ママ、とつても幸せよ……。貴方たちは、満足した？」

大量の牡汁をやつと全て飲み干し顔を上げた沙希を、荒い息を吐き散らし、よだれを迸らせながら血走った四つの瞳が見据えていた。その様子からはとても満足しているとは言えない。ならば、もう一度口で。そう漆黒の令嬢シスターが思い直した直後。

「クク。ガキども、お口はもう飽きたろう。今度はママと……おねんねしてる悪魔のお姉ちゃんのおマ○コをたっぷりと使わせてもらえ……クハハハッ！」

（ああ、まだ……子供たちのおちんちんを味わわされる……）

敵魔犬の瞳がまたしても妖しく輝くのを確認しながら、沙希は絶望と期待の入り混じった視線を息子たちに差し向けていた。

「起きなよ、リズ。ねえリズってば」

声が聞こえる。暗く、重たく沈んだ意識の中で褐色の悪魔は耳元で響く少し野太い声にぼんやりと意識を引きつけられていた。うつ伏せで横たえた腕が冷たい。硬い地面の感触。そもそも、なぜ自分は冷たい地べたに寝転がってなどいるのか。

——グイッ！

「きゃんッ！　だ、誰よお、人の尻尾引っ張るのはあつ!!」

突如尾てい骨を襲った鋭い刺激に、慌てて背後を振り向き顔を上げた。一番の性感帯を無下に扱われたことへの怒りでつり上がるまなざしに映し出されたのは、一匹の魔犬の姿。

「はは。犬みたいな鳴き声。やっど起きたな。間抜けの悪魔ッ娘」

「ちよ、ソルディ様じゃないですかあ。もう、悪戯はよしてくだ……んん？」

背を起こすことも忘れ、うつ伏せで相手に尻を向けた間抜けな体勢でいつも通りの応対をしそうになり、ソルディの異様な容貌をじっと見つめる。無邪気なガキ大将らしからぬ血走った目つき、よだれを噴き零す獐猛な口腔。

そしてようやく一つの事実を思い出した。絶対の忠誠を誓う主人・沙希の子である三匹

の魔犬は、同族である敵魔犬の術中に陥り、操られているのだ。

「ふう、ふう。俺さ、いつかりズの可愛いお尻にかじりついてみたかったんだよね」

「ひ、ちよつとやめてくださいって……ジョ。ジョークですよ。ねっ？」

とてもそうは思えないが。一応兄弟犬一気性の荒い彼に尋ねてみる。案の定否定を示す首振りが返され、女悪魔の心は暗澹たる沼に沈んだ。

実力ではとても敵わないうえに、元より家族同然に暮らし乳母として育ててきた彼らに危害を加えることなど、考えることもできない。

どうしたものか——ちらりと横目でソルディの向こう側を見やれば、沙希がレニードとオルガ、そして名も知らぬ敵魔犬に囲まれ漆黒のゴスロリシスター服で身構えているのが見て取れた。気絶してどの程度の時間が経っているのか分からないが、状況が好転しているようには少しも思えない。

どうやら、頼もしいご主人様兼相棒の援軍も期待できそうになかった。

「うう……こ、こないで。っていうか正気にお戻りください……ふあん！」

よそ見をしている間にも、尻尾を手綱代わりに握る子犬がじりじりと近づいてくる。口元に覗く獐猛な牙、四足に煌めく鈍色の爪。魔界随一の戦闘種族である魔犬一族。その王であるギリアムと人界屈指の女エクソシストの間に生まれた戦いのサラブレッド。褐色のうなじに嫌な汗が滴る。

まだ■■■■であるとはいえ全身から威圧的な気を発しにじり寄るソルデイの前に、リズは蛇に睨まれた蛙も同然、一步も動くことができずその場で立ち尽くした。

「へえ。ココ、すっげえ弱いんだなあ。リズの弱点めーけたっ」

——クイツ、クイツ！

「ひゃあん、や、やめてくださいあいっ……そこ、ぎゅつてされるとお……くう」

鋭い爪で掴まれた尾を引かれるたびに、腰から下が砕けそうになる。ソルデイに向けた尻肉が黒のボンデージ生地に包まれた肉たぶをプルプルと揺すり、気絶前に散々舐めしゃぶられた陰門は早くもしつとりと蜜を湛えて、よじれた股布の隙間からふうんと牝悪魔特有の甘い芳香と邪気の混じった蜜汁を滴らせ始めていた。

魔犬が最も好む、故郷の暗黒を思わせる気と、甘い蜜との混合液。

「へへ。今から甘ったれた牝悪魔にオシオキ棒をくれてやるからな。この、甘ったれたみつともないケツにさ！」

——パチインツ！

「あぐっ!? い、いたああ」

尻肉を前足の甲で叩かれた——。尻肉に奔る痛痒に顔をしかめた直後、魔犬は跳躍一番空を駆け、褐色の尻肉目掛けて覆い被さってきた。

双臀の上に置かれた獣毛の刺々しさと、谷間に感じる灼熱の淫欲棒。男の獣欲を充満さ

せる肉の楔がボンデージの脇を滑り、尻谷の奥で窄まる小さな排泄穴へと突きつけられている。ぬるぬると透明の先走りが穴周辺の皺一本一本に塗りつけられ、言い知れぬ被虐悦楽に背がゾクゾク跳ねる。

尻を振ったのは、果たして逃れるためか、それとも快楽に自ら悦びの声を上げたのか。捕まえられた尻尾を視点に重心をかけられ、一気に押し込められる肉の硬さに、女悪魔の窄まりが一層きつく萎んだ。

「やつ、やめ……あぎやううううッ！」

——ずっ、ずぬぶぶぢゅううううッ！

硬い突端が抵抗する括約筋をこじ開け、圧倒的な腰の圧力でねじ伏せてずぶずぶと根元まで沈み込む。暖かな腸内に驚くように常にビクビクと飛びはねカウパーを吐き散らかし、それでも侵攻をやめない牡肉に、思わず使い魔の子宮がキュンと高鳴った。

（な、なんて硬いのお、アイツ、ディアックのより全然イイツ、嘘、まだ童貞のはずなのに、子供のはずなのにいい……！）

「っああ。スゲエ、全部……埋まっちゃまった」

腸内の感触を確かめるように一度、二度。ソルデイがうつ伏せの褐色尻に押しつけた腰を大きくくねらせる。初めての女の体内に喜悦で撃ち震える龟头が、強かに腸壁のあちこちを擦り、その都度女の反応を確かめるようにリズの顔を覗き込む。

「あつ、あひ！　そ、そんなに腰動かさないうでくださあ、あつあああ……！」

獸網に覆われた腰が尻をくすぐると同時に、深く沈み込んだ肉棒が狭い窄まりの内で粘膜をこそげ取っていく。四つんばいで尻を掴まれ獸の交尾体勢で、あろうことか尻穴を犯され、すでに幾度となく貫かれた経験のある肛門が卑猥にもヒクヒクと蠢いた。

「馬鹿。動かないと気持ちよくないだろ！」

パシッ！　また尻を叩かれ、ソルディがゆつくりと腰を揺すり立て始める。やはり童貞であるためかその抽送はぎこちなく、おっかなびつくりという表現がしつくりと当てはまる。肛門へと潜り込んだ獸肉棒は、激しく脈打ち雄々しい存在感を腸粘膜に刷り込んでいた。だが肝心の腰使いがこの有様では、宝の持ち腐れだ。

（こ、これじゃ、生殺しだよお……せつかく大きなカチコチおちんぼが入ってるのに！）

徐々に、リズの腰が勝手に牡肉を味わおうと動き出す。より深くへ誘うよう筒状の穴全体が肉幹に吸いつくと、牡犬のみならず女悪魔自身も淫熱に溶かされ、腸内できりと蜜を漏らす。

「んんっ、んああっ！　硬いのがお腹の中でジュコジュコ滑るよおおおううッ！」

「うわあ、わつあう！　リズ、はげしっ、ちんこ痺れちゃううう！」

大人ぶっても所詮はまだ子供。沙希と毎夜肌を重ね、淫蕩の限りを尽くしているリズに翻弄されるがまま、三兄弟の長兄はぬめやかな肛内に肉槍を打ち込み続けた。パンパンと

公園内に響く肉同士の密着音は、確実に沙希の耳にも届いているはず。大事な息子の童貞をあるうことか尻穴で奪ったことを咎められ、今夜もお置ききされてしまうのだろうか。

（沙希の、ご主人様の靴を舐めさせられる？ それとも、それとも……くふうん！）

命を賭けた戦いの最中だというのに、生き延びた後の心配をして身の内で熱い欲情の塊が浮き上がってくるのを感じる。心なしか肛腔を抉るソルディの肉棒もより硬く尖り狂ってきているような気がした。彼も、母による愛情のこもった折檻を夢見て股間を膨張させているのかもしれない。

「ちつくしよ……リズのお尻、良過ぎんだもん、あくく、もうでっ……！」

（で、出るの……っ？ もう出すのおッ!!）

まだ幾分も尻穴の火照る粘膜を擦りたててもらっていない。まだ射精させてなるもんか——。天然気質の女悪魔にしては珍しく決意を秘め、腰を強く押しつける。そうしておいて、下腹に力を込めて肛門をきつく収縮させた。

「ぎやう！ ぎやわああんッ！ リ、リズッ、ダメっ、ちんこ千切れるっ！」

射精の途上で塞き止められ、行き場を失くした白い奔流が肉棒の内部で暴走する。きつく締め上げられた亀頭はびつちりと食いついた腸壁によつてより奥へ奥へと誘われ、引き締まる玉袋からポンプの如くひりだされる白濁でパンパンに張り詰めた輸精管がしきりに震えて尿意の数倍ものもどかしさを牡犬の胸に去来させた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>